

痕 跡

写真学科
吉田 成

Imprint of a Moment

Department of Photography
YOSHIDA Akira

点が集まって線になるように、瞬間の積み重ねによって時間になるのだろうか。
2017年 8 月 21 日 午後 6 時 55 分 現在、私が生まれてから約 60 年と 7 カ月、
22,119 日、530,862 時間、31,851,771 分、1,911,106,260 秒が経過した。「時は流
れる」と言うが、本当だろうか。もしもそうなら、長い時間が流れたことになる。
この膨大な時間を費やして、私は何をしたのだろうか。私が今言えることは、「い
つか必ず死ぬ」ということだ。人は科学の力によって不老不死を手に入れること
が出来るともかもしれない。しかし、「死」が必ず訪れるからこそ分かることもある
と思う。私たちが感じる「時間」は、死と深く関わっているような気がする。

ある人は、「写真は記録だ」と言う。また「写真は表現だ」とも言う。ある人
は、「写真を撮ることは、空間を切り取ることだ」と言う。また「写真を撮ること
によって、瞬間を封じ込めることが出来る」とも言う。私も、同様のことを言っ
てきた。きっと、どれも正しいのだろう。しかし最近、思う。「写真はものの影
であり、瞬間の痕跡にすぎないのではないか」と。そして私は、その影と痕跡と
を手繰り寄せながら「思考」しているのではないだろうか。ものの影と瞬間の
痕跡とを手繰り寄せ、思考し、再構築する。そのことの意味は何なのだろうか。

私に「命」がある限り、池に雨が降る瞬間にも意味を感じることができる。捨
てられたピアノや砂丘に刻まれた足跡にも意味を見出すことができる。そして私
に死が訪れるまで、途絶えることなく、瞬間が積み重ねられていく。そんな風に
考えながら撮影し、写真を選んだ。

付記：本作品は吉田成が撮影し、アトリエマツダイラがプリントした。













